

『回回薬方』の鍼灸門について

猪飼 祥夫

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

『回回薬方』は、全巻36巻で現存4巻である。アラビア医学の中国伝播を窺うことのできる回回医学の貴重な書物である。残存巻は目録巻下、巻12、巻30、巻34で、紅格子の抄本である。鍼灸門は巻30に含まれる。この残存巻にはアラビア語の薬名や、ギリシャのヒポクラテス、ガレン、アラビアのイブナーシーナ、ラージーなどの医者や、アラビア医学の処方が翻訳されている。

『回回薬方』は、最初に陳垣の『元西域人華化考』によって注目された。陳垣、范行准などは元代の著作と考えているが、『回回薬方考釈』を著した宋峴は北京が北平と呼ばれたことから明初の洪武年間(1368-1402)に著作とされたとしている。陳明もこの意見に同意している。しかし、王興伊はこの書を事細かに検証して、この文章に北方口語が大量にあることから、著者は北京に長く住んでいたか北京で生まれた回回の医者であると推定している。さらに千種以上の書物を引用した『本草綱目』にこの書物がないことを視点として、明の万暦21年(1593)には『回回薬方』はまだ完成していなかったとする。さらに阿・卡地兒によって『西日甫・本・佳馬力丁・阿吉伝』の伝記の中に、明末の庫車の著名な医薬家の胡都優木汗・阿吉(1567-1658)が1619年に『回回薬方』36巻の編集に主に参与したと明確に記載されてことが発見された。新疆ウイグルの古医籍にアラビア語ペルシャ語を用いて編写されているものが『回回薬方』と一致している。『回回薬方』には突厥語やウイグル語の特徴がある。以上のことから『回回薬方』は明末の1619年に成立したとする。

アラビア医学を主体に述べられるこの『回回薬方』に、なぜ鍼灸門があるのかを検討した。その鍼灸とは放血、焼灼術などで中国伝来の鍼灸とは異なるものである。鍼灸門と言っているが、灸療が主に述べられている。灸術はもぐさを使うものでもなく隔物灸のような方法でもない。「灸時須使皮破」とあるように鉄器で皮膚を焼灼する方法を灸と呼んでいる。アラビア語で鉤鍼を表す「辛納刺(sinnārah)」という器械で数か所にその皮を鉤かけその後これに灸をする。これらの灸の器械は長い鉄で頭が二つの分かれているものを用い、一度灸をすれば二か所にでき、三度すれば六か所にできる。後に焼灼療法(cauterization)などと呼ばれているものである。その方法はヒポクラテスの時代からあったものである。鍼灸門の初めに灸治療の目的を「灸各体証候類 説灸的動靜」として明らかにしている。そこではアラビア医学の体液学説を用いて説明している。体の中に悪液が凝り聚まると体と気が壊れると、臓腑を潤滑にする薬を用い、あるいは熱性、燥性の薬を用いる。それで浄化することができなければ、必ず火を持って灸をして、本体の病根を尽きさすのである。その病気に灸の力を得れば、その脈絡と本体が通じる。また自閉して堅く治らなければさらに回数を重ねる。鉄器を用いた灸で体表を焼いて発泡させて、体内の病の原因である悪液を除くのである。「膿水常流」とか「潤去浄」とかあるのは焼灼された灸処から体液が流れ出るさまを表現している。「肝経上有瘡」とか「多生胃経疼」とかの記述があるが、それが中国伝統医学の概念と同じというわけではない。翻訳の上で概念の似ている用語がつかわれた可能性が高い。さらに診断体系においても中国医学の弁証に似た用語が引用されている。風府穴の経穴名が見えるが、経脈に則ってとるべき経穴とはされていない。薬物も259種中で146種が伝統的中国薬であるが翻訳した用法である。多くの伝統的な中国医学の概念や名称が流用されているが、全体的にはアラビア医学を中心とした医学体系によって纏められている。『回回薬方』はアラビア医学の中国伝来を考える上で重要な著作である。鍼灸門は西洋医学で長く用いられた焼灼療法を記述していることによって貴重である。